



「今八幡宮鰐口拓本」（内田伸採拓史料183）



「音」で読み解く
防長の歴史

♪ 27

芸能ノオト②

鰐口（わにぐち）

【鰐口って何？】

お寺やお宮の軒先に懸けられ、お参りする人が願い事がかなうように祈りながら、前面に垂らしてある布縄を用いて、打ち鳴らすものです。

铸った銅または鉄でできており、全体の形は扁平の円形で、鉦鼓（しょうこ）を二つあわせた形に似ています。

下側の口と呼ばれる部分が大きく割れている形を鰐の口に見立てたことから、鰐口という名前がつけられたと言われています。ほかに金鼓（こんく）・金口（こんく）・打金（うちがね）・打鳴などとも呼ばれます。

表面には、寄進者の名前、年代、製作者である鋳物師（いもじ）の名前などの銘文を刻する場合が多く、大きさは直径10cmぐらいのものから1mを超えるものまで、さまざまです。

【今八幡宮鰐口】

大内義隆が、天文3年（1534）に筑前国遠賀郡葦屋（現、福岡県遠賀郡芦屋町）の金屋大工である大江宣秀に注文して造らせ、今八幡宮に寄進したものです。

大内義隆は、当時西中国～北部九州において大きな勢力を誇っていた大名大内氏の当主であり、今八幡宮はその大内氏の本拠地であった山口の総鎮守にあたるお宮です。

この鰐口は銅製で、大きさは面径85.3cm、総厚30.0cmです。鰐口としては、かなり大型で、その大きさゆえに一度では铸造できず、鋳継いでいます。

「耳」は龍頭耳、「目」は出が多く先に広がった喇叭（らっぱ）状になっています。また、表面の「内区」と呼ばれる部分には、「天文三年甲午卯月上旬」という製作年や、製作者名や施主である義隆の名などが刻銘されています。「銘帯」には、宝珠や雲竜の彫刻も見うけられ、「撞座」の文様には蓮華文が施されています。

なお、この鰐口は昭和34年に国の重要文化財に指定されました。現在は、山口市歴史民俗資料館において寄託展示（常設）されており、間近で見ることができます。



「内田伸採拓史料」

内田伸氏（1922～）の労作『山口県の石造美術』及び『山口県の金石文』に掲載された、梵鐘・鰐口・石造物など年紀の刻まれた金石文の拓本を集積したものです。

内田氏は山口市鋳銭司の出身。山口市職員として山口市歴史民俗資料館長などを歴任。社寺建築をはじめ石造美術や雪舟・大村益次郎の研究及び民話伝説の蒐集など多方面で活躍されました。また、山口県地方史学会理事や山口県文書館地方調査員、山口の文化財を守る会の要職も歴任し、文化庁地域文化功労者表彰も受賞されました。

著作は『大村益次郎文書』、『山口県の金石文』等々多数あります。

（銘文：表の右から）

※奉寄進鰐口周防劔山口今八幡宮菩大薩御寶前
大檀那從五位上守左京大夫多々良朝臣義隆
施主神明大宮司從五位下橘朝臣兼重同歳信藤原朝臣景助
于時天文三年甲午卯月上旬葦屋金屋大工大江朝臣宣秀敬白

【葦屋金屋大工大江宣秀】

筑前国遠賀郡葦屋（現、福岡県遠賀郡芦屋町）は、中世に鋳物師（いもじ）の集団が住んでおり、彼らが製作した葦屋釜の産地としてよく知られていました。今八幡宮鰐口が作られた当時は、大内氏の承認のもと、麻生氏が治めていました。

「葦屋金屋大工」つまり、葦屋の製鉄所職人の指導者という肩書きを持つ大江宣秀は、享禄5年（1532）銘の興隆寺銅鐘（国の重要文化財）や天文元年（1532）銘の貴飯山妙見社（現、下関市菊川の美栄神社）の鰐口（山口県指定有形文化財）も製作しています。いずれも大内氏にゆかりの深いお寺やお宮です。

文化に造詣の深い大内氏に認められていたことや、作品が現在文化財に指定されていることから、彼が当時の一流の鋳物師だったことがうかがえます。



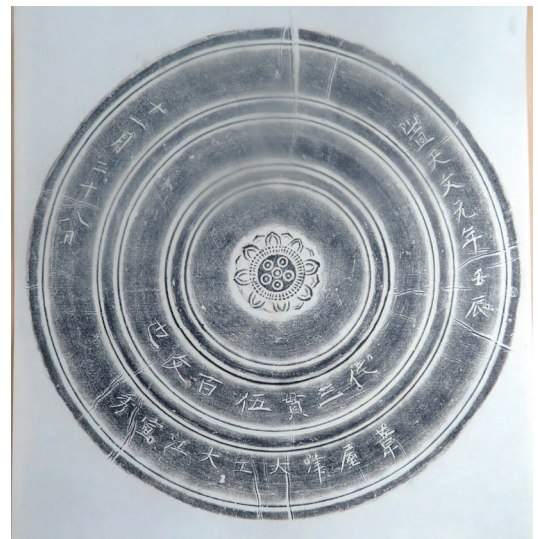
今八幡宮鰐口
（山口市歴史民俗資料館寄託）



鰐口の各部分の名称
（小学館『日本大百科全書』より転載）



今八幡宮（山口市）



「美栄神社鰐口拓本」（内田伸採拓史料181）
裏面の銘帯の最下部に「葦屋津大工大江宣秀」の名前が見えます。